

**特集「ナショナリズムの表現」：古活字版の淵源
をめぐる諸問題：所謂キリシタン版起源説を中心に**

著者	小秋元 段
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	8
ページ	221-237
発行年	2010-08-10
URL	http://doi.org/10.15002/00022636

古活字版の淵源をめぐる諸問題

—所謂キリシタン版起源説を中心に—

小秋元 段

1 日本における活字印刷のはじまり

日本における活字版の濫觴は、文禄2年（1593）に刊行された後陽成天皇による勅版『古文孝経』とされている。本書の刊行の経緯は『時慶記』文禄2年閏9月21日条から同年11月16日条にかけて記されるものの、原本は見いだされていない。それゆえ、所用活字が木製なのか金属製なのか、朝鮮製なのか日本で模造されたものなのか、知ることができない。古活字版の淵源に不分明な余地が残る所以である。

文禄勅版ののち、早くも民間では本国寺版『天台四教儀集解』『法華玄義序』（以上、文禄4年〈1595〉）、小瀬甫庵版『補注蒙求』『十四経発揮』、如庵宗乾版『証類備用本草序例』（以上、文禄5年〈1596〉）等が開版された。つづく慶長年間に入ると、後陽成天皇は再び数種の勅版を刊行させる。慶長2年（1597）刊『錦繡段』『勸学文』、同4年（1599）刊『日本書紀神代卷』『古文孝経』『四書』『職源鈔』、同8年（1603）刊『白氏五妃曲』『長恨歌琵琶行』である。このうち、『錦繡段』『勸学文』『古文孝経』『四書』には、匡郭の固定された植字版が用いられていて、その印面には古活字版によく認められる、匡郭の四隅の空隙が見えない。これに対して、『日本書紀神代卷』『職源鈔』『白氏五妃曲』『長恨歌琵琶行』には、四辺の匡郭を組み合わせる四注式が採用されている。一般に日本の古活字版は四注式を採用しており、慶長勅版で固定式・四注式が併用されたことは、古活字版の淵源をめぐる議論に若干の影響を与えた。

古活字版が興る時期、日本には朝鮮版とキリシタン版の二つの活字印刷技術がもたらされていた。これまで日本の活字印刷技術は文禄の役（1592～93）

の際、朝鮮より掠奪されてきたという考えが通説となってきた。朝鮮版の活字の字体や表紙の文様などが古活字版と類似するほか、古活字版の技法が朝鮮に由来することを窺わせる記録も複数ある。中でも慶長勅版『勸学文』の以下の刊記は重要だ。

命工每一梓鏤一字、碁布之一版、印之、此法出朝鮮、甚無不便、茲摸寫此書、
慶長二年八月下澣

ここには活字印刷の技法が、朝鮮に由来するものであることが明記されている。同様の文言は、同年に刊行された勅版『錦繡段』にも見られ、こちらには南禅寺玄圃靈三の手による刊語の中に、「此規模頃出朝鮮、伝達天聰、乃依彼様使工摹写焉」とある。このほか、『慶長日件録』慶長10年7月28日条には、禁裏へ銅活字十萬個を進上することを申し入れた徳川家康が、その見本として借り受けていた「高麗銅一字印」を宮中に返納した旨が記されている。この高麗製銅活字が実際に使用されたのかは不明だが、日本における活字印刷発祥の地である宮中に、かの国の活字が収蔵されていたことは無視できない。また、小瀬甫庵が寛永の末頃に著したとされる『永禄以来出来初之事』には、

一字版 是はかうらい入有し故也、

と見えている。秀吉の朝鮮出兵を契機に活字印刷がはじまったことが、ここでは明言されているのだ。やや後年の記録であるとはいえ、文禄・慶長の交に自ら活字印刷を手がけた甫庵の言であってみれば、重視しないわけにはゆくまい。

その一方で、キリシタン版の活字印刷技術は文禄の役よりも早く日本に導入されていた。天正18年(1590)、イエズス会巡察使アレックスandro・ヴァリニャーノは活字印刷器具一式を日本にもたらし、肥前国加津佐の学林に設置した。翌年、『サントスのご作業のうち抜書』を刊行し、以後、布教活動や宣教師たちの学習のために、教義書・文学書・辞書の類を世に送り出した。現存するものは30種を超え、そこではローマ字・国字両種の活字が使用されている。キリシタン版は現存本の数こそ少ないが、実際の刊行実績は大きかった。ただ、

その基盤を加津佐・天草・長崎などの九州の地としていたことや、古活字版との関連を裏づける文献上の証跡を持たないことから、古活字版への影響が想定されることは少なかったのである。

ところが近年、キリシタン版を古活字版の起源として認識しようとする動きが強まっている。古活字版と朝鮮版との間には技法上の差異が存在し、むしろ古活字版とキリシタン版との間にこそ連続性があるという考えが支持を得つつある。また、初期古活字版の刊行者である角倉素庵に関する研究が進み、彼がキリシタン版を容易に受容し、木活字印刷に応用し得る立場にあったという推論が立てられたことも、こうした論調を支えている。しかし、古活字版の起源をキリシタン版に認める考え自体は、近時俄に注目されたのではない。今から百年前、新村出がキリシタン文献を探究する中で、これに通じる重要な発言を残しているのだ。そこで小稿では、古活字版のキリシタン版起源説の来歴をたどるとともに、近年の学説を紹介し、これを書誌学上の問題としてどのようにとらえるべきか、聊か私見を述べることにしたい。

2 アーネスト・サトウによるキリシタン版の紹介

キリシタン版の存在を世に紹介する魁となったのは、レオン・パジェスの *Bibliographie Japonaise*. Paris, 1859 (『日本図書目録』) であるが、実質的な研究の祖としてはアーネスト・サトウの名をあげるべきだろう。文久2年(1862)、イギリスの外交官として来日したサトウは、日本の地誌・文化史・神道・キリスト教史にかかわる論考を *Transactions of the Asiatic Society of Japan* (『日本アジア協会紀要』) に発表し、やがてその考察対象を印刷・出版史へと広げた。明治15年(1882)、“On the Early History of Printing in Japan” “Further Notes on Movable Types in Korea and Early Japanese Printed Books” の2編を同紀要第10号に発表しているが、この段階でサトウはまだキリシタン版の存在を知らなかった。サトウが欧州の図書館でキリシタン版の調査を行うのは明治20年(1887)から21年にかけてのことであり、21年には私家版として *The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610* (『日本耶蘇会刊行書志』。大正15年〈1926〉、警醒社書店より復刊) を刊行することになる。

本書には14種のキリシタン版の書誌と考察が収録されており、新村出をはじめとする研究者に多大な影響を与えた。なお、明治32年(1899)、サトウはこの追補として、“The Jesuit Mission Press in Japan”を『日本アジア協会紀要』第27号に発表している。

サトウは古活字版とキリシタン版との関係をどのように考えていたのであろうか。残念ながら、この問題への言及は『日本耶蘇会刊行書志』のPREFACE(序言)で、一言なされているだけである。ここでサトウは、日本の活字印刷技術は2世紀半以上前からこれを用いていた朝鮮よりもたらされたとするのが、かつての自身の結論であったと述べる。そして、その時点では、日本の古活字版より数年早く刊行されたローマ字のキリシタン版が、欧州の図書館に存在することに気づかなかったとも述べたうえで、日本の活字印刷におけるキリシタンの関与の可能性をつぎのように記す。

It seems possible therefore, though perhaps not very probable, that the Japanese may have learnt the advantages of typography from the missionaries, and not from the Koreans.

(それゆえ、日本の人々は活字の利点を朝鮮の人々からではなく、宣教師たちから学んだかもしれないということが、確実性は高くないものの、可能性としてはあるように見うけられる。)

後述する新村出はこの部分をとりあげて、サトウが古活字版の起源をキリシタン版に認めたものと受けとめた¹。だが、ここで注意すべきは、サトウはその可能性はあるとしつつも(It seems possible)、その蓋然性は高くないと考えていた(not very probable)ことである。実は引用文の直前で、サトウはキリシタン版の国字本の最古のものが1598年のものであり(『落葉集』)、1594年の書翰に現れる国字版教義書も整版であったろうと述べ、国字によるキリシタン版の誕生は古活字版よりもあとだったことを示唆している(サトウは刊記から知られる最古の古活字版を1596年の『補注蒙求』としている)。つまり、サトウは古活字版の起源が朝鮮にあることは動くまいと考えていたのだろう。こうした序言の文脈を考えてみると、上記の一文は、キリシタン版の刊行が古活字

版の誕生よりいかに早かったかを強調するために記されたものと思われる。これを以て、サトウが古活字版の起源をキリシタン版に認めていたと見ることはできないのだ。

3 新村出のキリシタン版研究

日本におけるキリシタン版研究の道は、新村出によって開かれた。音韻の分野から言語学研究に入った新村にとって、室町末期の口語を伝えるキリシタン版は重要な資料であった。明治41年(1908)から42年にかけて、欧州留学中の新村がオックスフォード大学ボドレアン文庫と大英博物館でこれら資料を閲覧し、その価値を認識したときの感激は、『薩道先生景仰録—吉利支丹研究史回顧—』(ぐろりあそさえて、昭和4年〈1929〉)に詳しく記されている。

新村のキリシタン版研究は多岐にわたるので、ここでは古活字版とのかかわりに関する言説に限定して論を進めたい。帰朝後、新村がはじめてこの問題に言及したのは「天草出版の平家物語抜書及び其編者について(一)(二)」(『史学雑誌』明治42年〈1909〉9月号・10月号)においてである。ここで新村はキリシタン版と古活字版の関係をつぎのように述べている。

翻つて本邦に於る活字伝来の歴史を按ずるに、諸説未だ一定せず、其由来或は古く足利時代にあらんも、記録と実物即ち現存活字版本との明証によれば文禄慶長の年代を以て濫觴とすべく、活字又は其術の朝鮮より伝来しけんことも亦蓋し信ずべきが如し。¹唯、之を以て征韓役の副産物とせんこと頗る疑ふべし。『時慶卿記』に見ゆる文禄二年閏九月起工の勅版『古文孝経』の活字を、征韓役に出でしとするは不可能にはあらざるも、年代稍々早きに過ぐるの感あればなり。そはともかくも、本邦活字版の権輿と西洋印刷術の伝来とが、略々年代を同じうすること、即ち同時代に活字印刷術が南蛮と高麗との両方より伝はりしことは、実に千載の一遇といはざるべからず。²英のサトウ氏、独の某氏(ミュンステルベルヒ氏と覚ゆ)等が、日本活字の起源は西洋にありと考へ得べしとのやうに説きたるは謂れなきにもあらず。(圈点新村)

新村は、活字印刷技術が朝鮮から伝来したことについては認めつつも、傍線部1のように、それが秀吉の朝鮮出兵によってもたらされたとする考えには疑義を挟んでいる。文禄の役と文禄勅版『古文孝経』刊行の間があまりにも近接していたからである。その一方で、古活字版の創始期に西洋の活字印刷術が伝来していたことを圏点部のように強調し、傍線部2において「日本活字の起源は西洋にありと考へ得べし」と説いたというサトウらの考えに共感を示した。前節で確認したように、サトウは古活字版の技術がキリシタンに由来するものと考えていたわけではなかった。しかし、新村はサトウが古活字版の起源をキリシタン版に認めていると見なして、これに一定の賛意を示したのである。この時点での新村は、古活字版の起源を西洋に求める考えに惹かれるものを持っていた。

ところが、この姿勢は少しあとに発表された「活字印刷術伝来考」（『藝文』大正元年（1912）9月号）では弱まることになる。本論ではキリシタン版のみならず、朝鮮活字版の技法が日本へ流入する経緯についても詳細に説かれている。その中で新村は、朝鮮陣からの活字の献上を受け、文禄勅版の事業がはじまったと想定することは時間的に見て可能だとして、前稿の軌道修正を行っている。そして、活字印刷には朝鮮系と南蛮系の二つの源流があると述べ、両系統と古活字版の関係をつぎのように説いた。

要するに慶長十三年の整版『伊勢物語』と同十四年の『太平記』とを目安として論ずれば、我国の平仮名本は同元年の活字暦本を除けば、吉利支丹版の平仮名本に後れること六七年乃至十年である。慶長二年朝鮮活字に摹して『錦繡段』が出来た様に、慶長十年以後の平仮名活字は其以前の吉利支丹活字に何も負ふ所がなかつたろうか。歐洲の刮字工は既に後藤登明の如き長崎の邪宗徒に其術を伝へた様である。而して其術が宗徒以外に何等の影響を与へずに済んだか。昔の堺や博多の位置に当る長崎から京洛辺に此の遠西の奇器を、運用することが伝はらずに終つたか。慶長以来邪宗禁制の政策は次第に峻厳を加へたけれども、寛永以後の思想殊に鎖国時代の考方を以て広く智識を海外に求めた慶長時代の文化を觀察するのは当を失する。嗟峨本を弄する好書家は素庵が、乃父に安南渡航船を管し

た了以を、祖父に策彦と共に入明した宗桂を有したことを念頭に置かば、海運王の子、大工業家の子たるを知らば、以て略此間の消息を察する事が出来よう。然し素庵自身を以て直ちに伝来者と目するのではない。要は欧西の技の九州の一端より東漸したことは、其時代の風潮より察すれば possible だといふに止まる。

傍線部1のように新村は、真名活字本は朝鮮活字版に由来すると位置づける一方で、それより遅れて現れた平仮名古活字本—この時点で新村は、平仮名古活字本の最古のものを慶長14年(1609)版『太平記』と見ていた—にはキリシタン版からの影響があると考えた。実際、平仮名活字の使用の先蹤はキリシタン版の方に認められる。それゆえ、海外交易と嵯峨本出版の交点に位置する角倉素庵のごとき人物が活躍した当時の文化交流の道筋を考えれば(傍線部2)、長崎の技術は容易に京都にもたらされる可能性があったと推測したわけだ。さらに付け加えれば、新村は上記の引用文のあとで連続式の平仮名活字について触れ、西洋にも同様のものが存在したと述べている。連続式の平仮名活字の創出が西洋の技法によったものと、新村は考えたのだろう。

だが、これらの考えも、このあとさらに修正される。「我国旧時の活字本」(『六条学報』大正10年〈1921〉1月号)には、つぎのような発言が見られるのだ。

かくの如く朝鮮系と西洋系との二つの活版術が我国に入つた差は僅か三年であります故に、西洋の一二の学者は日本の古代の活字印刷術は西洋人から入つたものだと云つてゐます。先の英国の公使サー・アーネスト・サトーは婉曲に其の意を洩らしてゐます。又独逸のミュンステルベルヒ氏はもつと明かに、此の印刷文明は西洋から日本に入つたと云つてゐます。けれども朝鮮系の活版術の発達を調べ又文禄年代の記録をたどつて見れば、それは誤りであることが知られます。西洋系のもは二三年前にはひる事ははひつたが九州の一角に止まつて慶長十年以前には京都にはひらなかつた事は明かであります。

ここでは日本の活字印刷技術が西洋より入ったとする考えを完全に退け、朝鮮に由来することを説いている。平仮名古活字版の問題に触れていないのは、これも朝鮮の技術によると考えるにいたったからだろう。この時期、新村は平仮名古活字版の誕生を「慶長八九年から十年以後」と考えていた（同論文）。そして、傍線部のように、西洋系の技術が慶長10年（1605）以前には京都に入らなかったともとらえていた。従って新村は、西洋の技術が平仮名古活字版に影響を与えることもなかったと認識するようになっていたのである。

こうして新村の考えは、古活字版の起源を朝鮮活字版に見る定説に落ち着いていった。しかし、新村はこの考えに完全に納得していたわけではなかった。昭和4年（1929）、サトウの死に接し、その足跡を回顧した一編、『薩道先生景仰録—吉利支丹研究史回顧—』には、つぎのような一節がある。

最後に一言しておきたいのは、石田幹之助氏も既に、『書志』解説の九頁に述べられた如く、明治十五年の一八八二年に発表した「日本印書史考」及び「日鮮活字版考」に於ては、未だ考へ及ばれなかつた所の日本活字と南蛮活字との関係についての考察は、サトー氏はほんの一言だけ一八八八年の『書志』の序言に述べただけであるが、私は大正元年以来今日までなほ半信半疑の問題として取扱ひ、今なほ未練を持つてゐると云ふことである。

「日本印書史考」「日鮮活字版考」とは、サトウが『日本アジア協会紀要』第10号に発表した論考である（前掲）。サトウがキリシタン版の存在を知るのはそのあとのことであったが、前節で確認し、また上の引用部にもあるとおり、キリシタン版と古活字版との関連をめぐるサトウの言及は『日本耶蘇会刊行書志』でも僅かなものであった。新村はここでもその言説をサトウがキリシタン版起源説を示唆したものと受けとって、「半信半疑の問題として取扱ひ、今なほ未練を持つてゐる」というのである（「大正元年」とあるのは、前掲「活字印刷術伝来考」をさす）。実際、これよりあと、『日本吉利支丹文化史』（東京地人書館、昭和16年〈1941〉）第二章第二節「活字印刷術の伝来」では、平仮名古活字版にキリシタン版の影響を認める説とこれを否定する説とが併記され

ており、「なほ詳しくは後考を俟ちたい」とも述べている。

そもそも、新村の研究はキリシタン版との出会いを契機として、一気に「南蛮学」へと進んだ。新村は明治40年（1907）3月に京都帝国大学助教授に任じられ、併せて欧州へ留学し、そこでキリシタン版を調査する機会に恵まれた。同42年3月に帰国すると、関連する論著として、6月に「勸善鈔」（『禅宗』）、9・10月に「天草出版の平家物語抜書及び其編者について（一）（二）」（『史学雑誌』）、43年7月に「落葉集」（『國學院雑誌』）、44年1月に「金句集」（『藝文』）、6月に『文禄旧記伊曾保物語』（開成館）、大正元年（1912）8月に「活字印刷術伝来考」（『藝文』）を発表した。そして、その間、ポルトガル国印度副王が豊臣秀吉に奉呈した親書が京都妙法院より出現するという出来事にも際会し²、新村の「南蛮研究熱はますます高まって来た」のである（『薩道先生景仰録—吉利支丹研究史回顧—』）。こうして新村はキリシタン版のみならず、室町・江戸期の東西文化交流全般を研究対象に広げていく。新村が当初、日本の活字印刷技術の由来を西洋に求め、後年にいたってもその考えに「未練」を持っていたのは、このような経緯を考えれば納得できよう。

なお、新村がキリシタン版に関する諸論を発表した明治40年代は、文壇では「南蛮趣味」が興る時期でもあった。明治40年（1907）、与謝野鉄幹・北原白秋・吉井勇・平野万里・木下杢太郎ら新詩社同人は九州地方を旅行し、異国情緒をたたえた詩を『明星』に発表する。新村が帰国する明治42年（1909）には、2月に杢太郎が第一作戯曲「南蛮寺門前」を『スバル』第2号に発表し、3月に白秋が『邪宗門』を公刊している³。この時期の新村が南蛮趣味に理解を示していたことは、一例をあげれば、白秋の詩を高く評価した「抒情小曲集『思ひ出』（北原白秋著）」（『藝文』明治44年〈1911〉7月号）などからよく窺える。こうした背景も、新村における古活字版の起源説をめぐる問題を考えるとき、見落としがたいものとなってくるのではあるまいか。

4 キリシタン版起源説の復活

しかし、書誌学研究の進展の中で、古活字版の技法は朝鮮に由来するものであるという考えが揺るぎないものになっていく。小稿ではその一々を紹介する

ことはできないが、例えば、昭和に入り、この分野の研究を牽引した川瀬一馬は、『古活字版之研究』（安田文庫、昭和12年〈1937〉）の中で新村の「活字印刷術伝来考」を引き、平仮名古活字版がキリシタン版の影響を受けて成立したという考えを批判している（第二編第二章「西欧活字印刷術の伝来と吉利支丹版」）。川瀬は西洋の技法を経なくても連続式の平仮名古活字を調製することは可能で、キリシタンの印刷術自体、宗教的・地理的制約から中央にもたらされることはなかっただろうと説いている。また、戦後のキリシタン版研究では天理大学附属天理図書館が中心的な役割を担った。その研究は活字の同定や材質の調査、版式の考察などを通じて、キリシタン版の全体像を明らかにするという壮大なものであったが、そこには古活字版の起源をキリシタン版に認めようとする言説は窺えない（天理図書館編『きりしたん版の研究』天理大学出版部、1973年、富永牧太『きりしたん版文字攷』富永牧太先生論文集刊行会、1978年、ほか）。

古活字版の起源にキリシタン版を想定する動きが出てくるのは、1980年代後半になってからである。その端緒を開いたのは、大内田貞郎・高部萃子「朝鮮古活字版に想うこと―特に活字の形状と植字版を中心に―」（『ビブリア』第89号、1987年）であった。ここで大内田は、東洋における活字印刷には、植字版に松脂・蠟・紙灰などで製する固着剤を敷き、そこに活字を並べる畢昇の技法（『夢溪筆談』）と、均一な大きさの木製活字を並べて匡郭で締めつける王楨の技法（『農書』）があることを示し、朝鮮の活字印刷は畢昇の方式によっていると指摘する。そして、これを高麗末期の活字版『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』の印面の特徴や、李朝初期の官版の開版において蠟を使用したことが明記される『世宗実録』の記事をもとに論証していく。そのうえで、日本の古活字版については、現存しない文禄勅版や、「此法出朝鮮」との刊記を持つ慶長勅版『勸学文』などは固着剤を使用する朝鮮活字版の技法によったが、連綿体を表す必要がある平仮名古活字本には、腰高の活字を組み立てるキリシタン版の技法が影響を与えたのではないかと論じたのである。

その後、大内田は「本館所蔵『君臣図像』の版種について」（辻本雅英と共著。『ビブリア』第93号、1989年）において、上記の問題を匡郭の形状から論じた。即ち、畢昇の方式に由来する朝鮮活字版では四周の固定された匡郭が用

いられるのに対して、日本の古活字版は四注式を一般とする。そうした中、慶長勅版『錦繡段』『勸学文』では固定式が採用されており、大内田はこれを朝鮮活字版の方式によるものであると再論し、そのうえで両書の刊語中の「此規模頃出朝鮮」「此法出朝鮮」の文言は、当時の古活字版の技法全般について述べたものではなく、両書の技法が一般の古活字版とは異なり、朝鮮のものによることを強調して記したのだと指摘した。そして、日本の古活字版に用いられた四注方式は、西欧の組版技法にヒントを得て、独自に開発されたと推測したのである。前稿では平仮名活字本に限定していた論説が、四注式をとる古活字版全体の問題として提議し直されたわけだ。

大内田とほぼ時を同じくして、森上修の論考が発表される。森上も大内田と同様、朝鮮活字版と古活字版の組版方式の差異に注目して、古活字版の起源にキリシタン版を想定した。「慶長勅版『長恨歌琵琶行』について（下）—わが古活字版と組立式組版技法の伝来—」（『ビブリア』第97号、1991年）では、まず薄手の台形活字と固着剤を用いる朝鮮活字版の「付着方式」（大内田論にいう昇昇の方式）の特徴を指摘し、それが自立式の腰高活字による「組立方式」（同じく王楨の方式）をとる日本の古活字版の組版技法と根本的に異なることを強調する。そして、古活字版の刊行期にあたる16世紀末から17世紀半ばまでの李朝古活字版の印刷技法はいずれも付着方式で、日本の組版技法にはつながらないと論じる。さらに、慶長勅版に関する緻密な印面調査を行い、慶長勅版では固定式匡郭の用いられた『錦繡段』『勸学文』を含め、すべてが組立方式で組版がなされていることを実証し、大内田の説を補正する。一方、キリシタン版ではインテルなどの「込め物」が用いられた組立方式がとられたことを明らかにして、これが日本の古活字版に共通することを指摘した。

上記のように、森上の説くところには大内田の論と重なる部分がある。だが、その研究は膨大な量の印面調査を行い、朝鮮活字版・キリシタン版・古活字版の活字・匡郭・インテルの形状や使用状況を究明したところに特徴があった。さらに同論考では、キリシタン版から古活字版への技術伝承の背景に、豊臣秀次を中心とした文化圏の存在を想定しており、こちらも独自の指摘となっている。文事を好んだ秀次のもとには、小瀬甫庵・閑室元信・曲直瀬玄朔・吉田宗恂・要法寺日性・秦宗巴ら、古活字版の刊行実績のある人物が側近として集

まっていた。秀次はキリシタンに理解を示し、宣教師たちと交流を持っていたことから、側近らはいくつ環境のもとで西欧の活字印刷技術を知り、実用化につなげていったというのである。この考えは、森上「初期古活字版の印行者について一嗟哦の角倉（吉田）素庵をめぐる一」（『ビブリア』第100号、1993年）においてさらに深められることになる。本論では吉田宗恂の甥角倉素庵に注目し、文禄・慶長期の古活字版の刊行者や刊行書がいずれも素庵とのつながりを持つことを指摘し、彼を西欧活字の技術導入の中心人物ではなかったかと推測している。豊富な資産を背景に、素庵は天正の末年より金属活字に代わる木製活字を試作し、文禄勅版以降の出版の需要に応えていったというのが、その見通しであった。

5 古活字版の淵源を探るための課題

岩波書店より1999年に刊行された『日本古典籍書誌学辞典』では、大内田が「キリシタン版」「慶長勅版」の項目を担当し、前節に見てきたとおりの考説を記述している。また、『本と活字の歴史事典』（柏書房、2000年）、『活字印刷の文化史—きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで—』（勉誠出版、2009年）でも、大内田の考察は進展を見せている。いまや、古活字版のキリシタン版起源説は一つの有力な見解として認知されるにいたったといえてよい。大内田と森上の研究は、朝鮮活字版・キリシタン版・古活字版三者の印刷技法を明らかにすることを通じて相互の関係を探る点に新しさがあり、古活字版の誕生を世界的な視野からとらえる点に魅力があった。また、文禄・慶長期の活字出版事業の背景に角倉素庵の存在を見すえる森上の考察は卓見といえ、近世初期の出版文化史に新たな光を与えるものであった。こうした近年の学説に多大な意義を認めつつも、僭越なことではあるが、なお残る疑問点を提示して小稿の結びとしたい。

大内田・森上の論によれば、朝鮮の活字印刷技術はすべて固着剤を使用した付着方式によったとのことであるが、果たしてそうなのだろうか。この問題の究明のためには、朝鮮活字版の技法を伝える『世宗実録』所収記事の解釈が、重要な意味を持ってくる。以下、当該の条として、李朝初期の官版に用いられ

た癸未字（太宗 3 年〈1403〉）・庚子字（世宗 2 年〈1420〉）・甲寅字（世宗 16 年〈1434〉）の特徴や鑄造の経緯に触れた記事を引用する。

A『世宗実録』卷 11、3 年（1421）3 月丙戌日条

前此印冊、列字於銅板、鎔写黄蠟堅凝然後印之、故費蠟甚多、而一日所印、不過数紙、至是、上親自指画、命工曹參判李葦、前小尹南汲、改鑄銅板与字様相准、不暇鎔蠟、而字不移、却甚楷正、一日可印数十百紙、

B『世宗実録』卷 65、16 年（1434）7 月丁丑条

召知中樞院事李葦議曰、太宗肇造鑄字所、鑄大字時、廷臣皆曰難成、太宗強令鑄之、以印群書、広布中外、不亦違歟、但因草創、制造未精、每常印書、必先以蠟布於板底、而後植字於其上、然蠟性本柔、植字未固、纔印数紙、有遷動、多致偏倚、隨即均正、印者病之、予念此弊、曾命卿改造、卿亦以為、雖予強之、卿乃運智、造板鑄字、並皆平正牢固、不待用蠟、印出雖多、字不偏倚、予甚嘉之、

C『世宗実録』卷 69、17 年（1435）8 月癸亥条

本国鑄字用蠟功頗多、後改鑄字、四隅平正、其鑄字体制二様矣、

まず、記事 A は庚子字の完成を受けて、癸未字の不備と庚子字の改善点を述べたものである。癸未字の段階では固着剤として黄蠟を多量に使用するとともに、印刷の効率は上がらなかった。よって、世宗は李葦らに植字版と活字の改鑄を命じ、庚子字が生まれた。その結果、活字の配植に蠟を使用することはなくなり、字も整然と並び、効率も上がったと記される。記事 B は甲寅字の鑄造を命じたときのもので、李葦に対する世宗の言葉が記録されている。かつて太宗は群臣の反対を押し切って癸未字の鑄造を成し遂げたものの、固着剤として用いた蠟が柔らかかったため、摺刷のたびに活字が動いてしまった。そのため、世宗はさきに李葦に命じて庚子字を鑄造させたところ、彼の工夫によって活字は整然と並び、蠟を用いるには及ばなくなったという内容である。大内田はこれを甲寅字の特徴を述べたものと解釈するが（「朝鮮古活字版に想うこと一特に活字の形状と植字版を中心に」）、文脈から判断して、ここは庚子字についての言及とするのがよい。つまり、記事 A と B は癸未字と庚子字について

て共通の内容を記しているのだ。

このほか、李朝初期の活字印刷術に関する記述としては、15世紀後半を生きた官僚成俔（1439～1504）の『慵斎叢話』巻7の記事が知られている。同書には活字印刷の工程が詳細に記されているが、ここでは植字をめぐる一節を引用する。

始者不知列字之法、融蠟於板、以字着之、以是庚子字、尾皆如錐、其後始用竹木填空之術、而無融蠟之費、

庚子字では植字版に敷いた蠟に固定するため、活字が尾の尖った形状をしていたという。その後一甲寅字からということになる一、活字間の空隙に竹木を込めることになったので、植字版に蠟を融かす手間はなくなったと伝えている。記事A・Bでは蠟を使用したのは癸未字までで、庚子字からは活字の遷動がなくなったと記されていたから、『慵斎叢話』の右の記事とはずれがあり、多少の問題を残す⁵。

だが、それよりもこれらの記事で注目されるのは、庚子字ないし甲寅字からは蠟を使用しなくても活字の配植が可能になったと記されることだ。記事Aでは「不暇鎔蠟」、記事Bでは「不待用蠟」、『慵斎叢話』では「無融蠟之費」と見えており、字義どおりに解釈すれば、固着剤を用いない印刷技法が現れたことになる。この点について大内田は、蠟は植字版に敷くだけでなく、植字終了後や印刷途中にも活字の動きを止めるために注ぎ込んだのであり、これらの記述は後者の用途の蠟について述べたもので、植字版に敷く蠟まで不要になったわけではないと解釈している（「朝鮮古活字版に想うこと—特に活字の形状と植字版を中心に—」）。しかし、金子和正「〔講演〕古活字本の印刷技法について—慶長勅版を中心として—」（『ビブリア』第67号、1977年）、韓国図書館学研究会編、千恵鳳代表執筆『韓国古印刷史』（同朋舎、1978年）などには、込め物物を使った組版では蠟を使用することはなかったとの見方が示されている。また、実際に朝鮮活字版の中には、日本の古活字版と同様の四注式によったものも多数存在している⁶。

固着剤を使用する印刷技法が、朝鮮活字版の大きな特徴であることは紛れも

ない事実である。しかし、ここで意識しておきたいのは、朝鮮活字版は付着方式で、キリシタン版は組立方式という二元論を立ててしまうと、日本の古活字版の淵源はたどれないのではないかということだ。つまり、記事 A・B や『慵斎叢話』からは、蠟を使用せず、込め物によって活字を固定する印刷技法が、朝鮮でも行われたと読むことができる。図らずも記事 C には、蠟を用いる活字と「四隅平正」の活字の「二様」が朝鮮にはあると謳われている。「二様」というからには、相応の違いを有する印刷技法が世宗期の朝鮮では並行して存在していたのではなかったか。だとしたら、議論の前提は大幅に変わってこよう。

以上が私の抱いている疑問である。私がこれまで調査し得た活字版の数は、大内田・森上に遠く及ばないであろう。また、両氏が究めた活字印刷の技法に関する知見には計り知れぬものがある。そうした中、あえて卑見を提示してみたのは、『世宗実録』や『慵斎叢話』を読むかぎり、そして現存する朝鮮活字版を見るかぎり、李朝活字版の印刷技法を付着方式一つで説明することが適切なのかという、素朴な疑問が起こったからだ。今後の課題として提示させていただけたらと思う。

注

- 1 新村は「活字印刷術伝来考」（『藝文』大正元年〈1912〉9月号）において、サトウ氏は『書志』の緒言に於て、「日本人は活版の便利を宣教師等より伝へたので、朝鮮人から学んだのではあるまいと考へ得られよう」（It seems possible therefore, though perhaps not very probable.）と述べたが、二つの源流があつて、朝鮮系と南蛮系とは、全く異流である事は上述の通りである。と述べ、『日本耶蘇会刊行書志』序言の一節への解釈を示している。「possible」と「perhaps」のニュアンスが十分訳出されていないように思われる。
- 2 その内容については、「印度副王より秀吉に送つた書状」（『藝文』明治44〈1911〉年6月号）参照。
- 3 南蛮趣味に関しては、井出洋一郎「明治末年から昭和初期の文芸・美術にみる南蛮趣味に就て」（『山梨県立美術館研究紀要』第2号、1981年）、畑中佳恵「「長崎」のイメージとしての「南蛮趣味」序論（下）」（『敍説Ⅱ』第3号、2002年）、「近代文学における「南蛮趣味誕生」の「同時代」」（『文献探究』第41号、2003年）、日高由貴「「キリシタン」をめぐる言述—新村出と名づけえぬもの—」（『大阪大学日本学紀要』第24号、2005年）を参照した。
- 4 上記の大内田の見解は、「「古活字版」のルーツについて」（『ビブリア』第98号、1992年）、「「古活字版」のルーツ、そして終焉（消滅）」（『ビブリア』第113号、2000年）にも示されている。

- 5 韓国図書館学研究会編、千恵鳳代表執筆『韓国古印刷史』（同朋舎、1978年）は両記事を勘案し、庚子字では活字同士の接する面は平正になったが、下面の錐型はそのままであったと解釈し、この段階では蠟は印刷中は不要になったが、組版時にはまだ必要であったと解釈する。そして、甲寅字の段階で活字は四隅平正になり、蠟も一切使用されなくなったと受けとめている。一つの合理的な見方であるが、『慵斎叢話』にいう「庚子字」が「癸未字」の誤りであったという可能性も検討してよいのではなかろうか。
- 6 例えば、『韓国古印刷史』所収の古活字標本、282、292、294、304、306頁参照。

〔付記〕 小稿は法政大学競争的資金獲得助成金「世界における江戸学の現在——一八世紀を中心に——」（研究代表者、田中優子氏）、科学研究費補助金基盤研究（C）「古活字版の展開を追う——慶長・元和・寛永——」（研究代表者、小秋元段）による研究成果の一部である。

<ABSTRACT>

Various Issues Surrounding the Origins of Kokatsuji-ban: Focussing on Theories of its Rise from Kirishitan-ban

KOAKIMOTO Dan

The general consensus has been that Japanese *kokatsuji-ban* (old movable-type printing) originated in Korean movable-type printing technology, however in recent years we hear loud support for the theory that its rise emanated from Kirishitan printing technology. This paper firstly examines the process which suggests the connection between *kokatsuji-ban* and *kirishitan-ban* introduced in the Meiji period, following along the lines of work by Earnest Satow and Shinmura Izuru. It then adds to the investigation the various theories from recent years advocating the rise from *kirishitan-ban*. Although these are greatly significant in indicating the common features of Japan and Kirishitan movable-type technology from a technical point of view, if we refer to passages from *Seso Jitsuroku* and *Yosai Sowa* which are records about Korean movable-type technology, it is hard not to be convinced that *kokatsuji-ban* originates from *chosen-ban* (Korean printing).